

こん とう こう

東光の群像～河内の今東光～

第三回企画展示では、東光の河内・八尾での生活の様子をご紹介します。まず最初に、東光が八尾と出会ったいきさつをふりかえりましょう。

【今東光：誕生】

今東光は今から117年前、明治31(1898)年に今家の長男として横浜で生まれました。父・武平は外国航路の大型船の船長でした。母・綾も明治期の高等教育を受けた才女でした。弟には、後に直木賞を受賞し初代文化庁長官となった日出海がおり、教育熱心な家系でした。

両親の東光に対する期待は大きく、将来を嘱望されていましたが、父の転勤に伴い在学していた関西学院中等部を諭旨退学となり、転校した豊岡中学校も退校処分になりました。聡明・早熟であったが故の若気の至りもあり、学制の枠から外れてしまったのでした。

【上京と名声、そして挫折】

↑早晩 執筆中（昭和32年：岩宮武二撮影） 放校処分の中の、上京し当初は画家を志した東光でしたが、次第に文学の道を志すようになりました。この頃出会ったのが、生涯の友となる川端康成、生涯の師と仰いだ谷崎潤一郎らであり、川端と親しくなった東光は、川端から(当時文壇への登竜門であった)第六次「新思潮」の同人に招かれます。元来旧帝国大学出身者で占められていた「新思潮」への参加は、当時の文壇の雄であった菊池寛の反対にもあいましたが、川端の菊池への熱心な説得により、嗜れて同人として認められたのでした。

次第に文学の才能を認められ頭角をあらわした東光は、菊池に誘われ大正12(1923)年「文藝春秋」の創刊にも名を連ね、翌年には川端らとともに「文藝時代」を創刊し、後に「新感覚派」と称される活躍でした。しかし、グループの中で独特の存在感を放つ東光は異色ともいえ、仲間との間にすれ違いが生じ、菊池との対立・決別に発展したのち、次第に文壇での活躍の場は失われていくのでした。

【離伏の時代を経て】

昭和5(1930)年、東光は32歳で出家し、周囲を驚かせました。その後は修行の必要もあり、以前に比べれば執筆のペース自体も落ちていきました。その頃の東光の作品には、宗教・美術といった分野のものが散見されます。ただ、果てることのない知的欲求と、生活手段としての執筆の必要性もあり、書くことをやめることはありませんでした。その当時の苦勞を、東光は多くは語っていないようですが、その諦めない、たゆまぬ努力が、後年の活躍に実を結ぶことになったといえましょう。

【「河内・八尾」との運命的な出会い】

昭和26(1951)年、53歳のとき、八尾市中野村(現在の西山本町)の天台院の特命住職を拝命し、八尾住人となります。東光には、「このまま都会に埋もれてしまうより、新天地で一旗揚げやろう」という気概がありました。

八尾に移り住んだ東光は、その人情・習俗・歴史の懐の深さに驚き、また異色の経歴である東光を鷹揚に受け容れる人々との出会いに、運命的なものを感じました。東光は八尾移住当初から、個人雑誌「東光」の創刊や「大阪文学会」の旗揚げ(同会機関紙「明日」の創刊等)を早々に果たし、精力的に活動しました。その活動は大きな反響を呼び、天台院には多士済々、希望に溢れた人々が集いました。東光はサロンとなっていた天台院に分け隔てなく人を招き、その中には当時産経新聞社の記者だった福田定一(後の司馬遼太郎)らの姿もありました。

時は高度経済成長の真っ只中であり、八尾の地も例外でなく開発の途上にありました。次々に新しい市街が造成され、新しい住人が次々に流入し、東光が運命を感じた、八尾の地も変貌を遂げつつありました。(裏面へ)